



くものいと

KU MO NO I TO

No. 45

関西クモ研究会

28 October 2011

くものいと No. 45

28 October 2011

目 次

コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方に関する一考察	関根 幹夫	1
植物に造網していたセアカゴケグモ	荒川 真	11
奈良県産のムロズミソレグモとマダラヒメグモ	荒川 真	14
パプアにおけるホシスズミグモの垂直分布	関根 幹夫	18
関西クモ研究会 採集会の記録（尼崎市都市緑化植物園）		21
滋賀県山門水源調査にて	黒田 あき	25
関西クモ研究会 2010 年度会計報告		27
関西クモ研究会 会費納入のお願い		28

くものいと 第45号

2011年10月28日 発行

関西クモ研究会

事務局：567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室

コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方に関する一考察

An analysis on the ways of using slender sticks on spider fighting

関 根 幹 夫

Mikio SEKINE

In this paper, I will discuss ways of using the slender sticks used for spider fighting with ‘Kogane’ spiders, or *Argiope amoena*, in terms of ethnoentomology. There is a slight variation among the usage of slender sticks in these games which volunteers put on. At Kajiki in Kagoshima Prefecture, the spider fighting contest was established in 1925. In those days, they might have enjoyed the games using slender sticks planted in the ground. In the Kajiki’s present style, the slender stick on which spiders are put is fixed onto a vertical post, in a horizontal position. This style had already come into being by about 1946. At Nakamura in Kochi Prefecture, the slender stick used to be held by the referee’s hand. Then, the usage of the stick had varied until it was fixed onto the vertical post. The spider fighting contest in Kainan City in Wakayama Prefecture and Kumamoto City are both modeled after that used in Kajiki. On the other hand, at Kashinourago in Nagasaki Prefecture, the slender stick is held by the referee’s hand on a nearly horizontal plane. Let me point out another possibility that the Kashinourago’s style still remains today because it is not connected with Kajiki. The referee’s hands are free in the Kajiki’s style, so the referee can judge the matches without any errors, do it lightning-fast, and protect spiders against injury or even death. Another point is that this style produces many detailed rules of the games. The facts above suggest that each of the spider fighting games has been refined even after volunteers first established the tradition.

要 約

本稿では、コガネグモを用いたクモ相撲における横棒土俵の扱い方の工夫が、この伝承遊びが行事化された以後もなされてきたことについて、民族昆虫学の観点から考察する。現在のコガネグモ相撲は、横棒の扱い方に違いがみられる。鹿児島県始良市加治木町では、1925年の行事化に前後し、地面に突き立てた棒上でクモを闘わせていたと推察されるが、1946年頃には、横棒土俵をたて棒支柱に取り付けて行う方法が採用されていた。高知県四万十市中村では、行司が

横棒土俵を手で持つ方法から、横棒をたて棒支柱に取り付けて行う方法に変化した。熊本市と和歌山県海南市のコガネグモ相撲は、加治木町の「くも合戦」の技法が交流により伝播したものである。一方、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷では現在、行司が横棒土俵を手で持つ方法で行われている。加治木町との交流がなかったことから、この地にこの方法が残っている可能性を指摘しておく。たて棒支柱に横棒土俵を取り付けることで、行司は両手を使うことが可能となった。この方法は、的確な勝敗の判定とクモを死なせない行司さばきをもたらした。細部にわたる勝敗のルールを生み出した可能性がある。

はじめに

クモを闘わせる子どもたちの遊びは、かつて日本できわめて広く行われていた(川名・斎藤 1985)。この遊びは殆どの土地で消え去ったが、クモを闘わせる遊びのうちの2匹のコガネグモを横棒の土俵上で闘わせるコガネグモ相撲は、現在おとなたちによって組織化・行事化され、保存継承されている。コガネグモ相撲は現在、鹿児島県姶良市加治木町、高知県四万十市中村、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷、熊本市(斎藤 2004)と、和歌山県海南市で毎年行われている(ビオトープ孟子 2008)。野中は、ヒトと昆虫との関わりの研究を、「応用昆虫学」、「文化昆虫学」、「民族昆虫学」の3つの枠組みに体系化した(野中 2005)。本稿は、民族昆虫学の観点から、行事化された日本各地のコガネグモ相撲を比較し、この習俗におけるクモと人々の関わり方という「関係化」のなかにある自然に対する人間の創造性の一端を明らかにするものである。

クモ相撲についての先行研究を概観すると、コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方に関しては十分な資料は示されていない。斎藤は、南西諸島でのオオジョロウグモやチブサトゲグモを闘わせる遊び、九州・四国・本州で広く行われていたコガネグモ相撲、東日本のナガコガネグモ相撲、房総・横浜や紀伊半島南部でのハエトリグモ相撲、ジグモやカバキコマチグモの遊び(三浦半島)について詳細な報告を行った。クモ相撲の習俗が、西日本から伝播し東日本で多様化した可能性を指摘した。また、クモの言い伝えの蒐集、日本各地と韓国でのクモの呼称の調査、民俗学的観点から人々のクモ観について報告をした。斎藤は、造網性のクモを闘わせる遊びは、1) 他のクモの網にクモを投げ入れて闘わせる、2) 地面で闘わせる、3) 地面にたてた垂直な棒上で闘わせる、4) 横棒上で闘わせる、という方法で行われていた、と報告している(斎藤 2002)。またクモ相撲で、コガネグモが好んで用いられたことに関する研究もある(吉

田 2004). しかし、コガネグモ相撲が、たて棒支柱に横棒の一端を取り付けて行うように変化したことに関しては、採り上げられてこなかった。筆者は、先にフィリピンのクモ相撲と横棒使用の日本のクモ相撲の比較から、クモ相撲における横棒土俵の扱い方の工夫がこの遊びの質を高めた可能性と、行司（審判）が横棒を手で持つ方式は、横棒使用のクモ相撲の原型である可能性に関して、予備的考察を報告した（関根 2010）。

現在日本の各地で行われている行事化されたコガネグモ相撲には、多くの共通点がみられるが、横棒の扱い方には違いがみられる。人々は、子どもの頃に遊んだコガネグモ相撲という伝承習俗を保護・継承するに留まらず、この遊びが行事化された以後も、この遊びの質を高める工夫を創造してきたのではないだろうか。また、早くからコガネグモ相撲の組織化がなされた加治木町の「くも合戦」の方式が、各地で模倣された可能性があるのではないだろうか。本稿では、このことを明らかにするため、現在のコガネグモ相撲における各地での闘いの方法・横棒土俵の扱い方、勝ち負けのルールを調べる。

方 法

2002 年から 2009 年の 6 月の第 3 日曜日に、鹿児島県姶良市加治木町の加治木町福祉センターで開催された「くも合戦」取材した。2005 年 8 月 7 日、高知県四万十市中村の一線神社境内で開催された「全日本女郎ぐも相撲大会」取材し、一線神社の川村公彦 宮司から聞き取りをした。女郎ぐもとは、コガネグモの中村方言である。2009 年 7 月 19 日、熊本市の中無田開門プレイパークで行われた「熊本くも合戦」取材し、熊本くも合戦実行委員会の藤本 宏さんから聞き取りをした。また 2005 年 7 月 17 日、和歌山県海南市の孟子不動院那賀寺前で開催された NPO 法人自然回復を試みる会・ビオトープ孟子主催の「こがねぐも相撲大会」取材した。さらに 2007 年から 2010 年の 3 年にわたり、海南市のわんぱく公園に会場を移したこのコガネグモ相撲取材し、主催団体の北原敏秀 理事長から聞き取りをした。2010 年 6 月 20 日、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷で、「檜浦山こぶ選手権大会」を開催している檜浦山こぶ愛好会の宮守公治さんから聞き取りをした。山こぶとは、コガネグモの檜浦方言である。また、長崎新聞の「檜浦山こぶ選手権大会」のインターネット上のビデオ映像を、2010 年 10 月 10 日に参照した（長崎新聞 ながさき動画館 <http://www.nagasaki-np.co.jp/kankou/douga/34/index.html>）。

結 果

1. 鹿児島・加治木町

約 1 m 30 cm のたて棒の支柱に、長さ約 60 cm の 1 本の横棒（「ひもし」と呼ばれる）の一端が固定されていた。この横棒の先端に「かまえ」と称するクモを待機させ、「しかけ」と称する対戦相手のクモを行司（主審）が仕切って向かい合わせた上で対戦させた。副審は、行司の前の一段低い床にいた。行司は、上からクモの闘いを見ているのに対し、副審は、下の方の裏側からクモの闘いを見ていた。勝ち負けの微妙な点は、行司が副審と話し合っただけで決着を着けていた（図 1）。2 匹のクモに戦闘意欲がみられない場合、行司はクモの脚に砂をかけ、闘いを促していた。勝ち負けのルールは、1) 相手のクモの後背尻（加治木町でドンという）に平たいクモの糸（捕帯）をかけたものが勝ち、2) 同じく後背尻（ドン）にかみついたものが勝ち、3) 相手のクモの糸が垂れて横棒からぶらさがったのをすかさずその糸を切り落としたものが勝ち、4) 戦闘意欲のないクモは、行司の判断により引き分けとする、というものであった。クモが死なないように配慮し、勝っても負けてもクモを自然に還していた。



図 1. 加治木町の「くも合戦」2002 年 6 月 16 日，加治木町福祉センター。

2. 高知・中村

水を張った木製の箱に約 60 cm のたて棒が取り付けられており、このたて棒の支柱に長さ約 50 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた。この横棒上で 2 匹のクモを闘わせた（図 2）。一條神社の川村公彦 宮司から、この闘わせ方は 15 年程前から考案されたものであり、横棒から落ちたクモが水をいやり、クモが横棒土俵に登り再び闘うのを促す工夫である、また、長時間の大会の間、横棒を手で持つことで行司が疲れるのを回避するためでもある、との聞き取りをした（2005 年 8 月 7 日）。勝ち負けのルールは、1) 相手のクモに糸をかけた

ものが勝ち（この決まり手を中村で「まきこみ」という）、2) 相手のクモの腹部にかみついたものが勝ち（「がっぷり」）、3) 相手のクモが横棒から糸でぶらさがったその糸を切り落としたものが勝ち（「やぐら落し」）、4) 相手のクモが逃げてばかりのときは優勢勝ち、というものであった。



図 2. 中村の「全日本女郎ぐも相撲大会」2005 年 8 月 7 日，四万十市中村の一條神社境内。

3. 熊本市

地面に棒を立て、このたて棒の支柱に長さ約 60 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた。この横棒の先端に「かまえ」のクモを待機させ、「しかけ」のクモを行司が仕切って向かい合わせた上で対戦させた（図 3）。勝ち負けのルールは、鹿児島・加治木町のルールに準じていた。藤本 宏さんからこの行事は、加治木町の「くも合戦」を参考に 13 年前（1997 年）に始めた、との聞き取りをした。



図 3. 熊本市の「熊本くも合戦」2009 年 7 月 19 日，熊本市の中無田閘門プレイパーク。

4. 和歌山・海南市

人工芝を張った板に、たて棒が取り付けられており、このたて棒の支柱に長さ約 60 cm の 1 本の横棒の一端が固定されていた。2005 年 7 月 17 日の大会では、二匹のクモはなかなか闘わずに「引き分け」となり、参加した子どもたちのジャンケンで勝敗が決まることが多かった。また、加治木町のように「かまえ」と「しかけ」という厳密な立会いは見られなかった。

2007 年と 2008 年、主催者により子ども行司役を務める小学生が加治木町の「くも相撲」に派遣され、行司の勉強をする取り組みが行われた（図 4）。2009 年の第 10 回大会には、加治木町くも合戦保存会の三役が来賓として招かれた。以上のように、この地のクモ相撲は加治木町との活発な交流がなされている。なお、北原敏秀 理事長から、この行事は東條 清さん（海南市教育長）により 2000 年に始められた、との聞き取りをした。



図 4. 海南市の「こがねぐも相撲大会」2008 年 7 月 13 日，海南市わんぱく公園。



図 5. 大瀬戸町檜浦郷の「檜浦山こぶ選手権大会」2002 年 6 月 23 日，大瀬戸町檜浦公民館（宮守公治氏 撮影）。

5. 長崎・大瀬戸町檜浦郷

宮守公治さんからの聞き取りにより、畳に座布団を置き、この上方で行司が手で横にして持つ長さ約 50 cm の棒上でクモを闘わせることを確認した(図 5). 勝ち負けのルールは、1) 相手のクモにかみついたものが勝ち、2) 相手のクモを横棒から落としたものが勝ち、3) 相手のクモが横棒から糸でぶらさがったその牽引糸を切ったものが勝ち、というものであった。宮守公治さんから、「檜浦山こぶ選手権大会」は 1982 年から行われている、2002 年加治木町で開催された「くも合戦全国大会」に前後して、加治木町くも合戦保存会の檜浦郷訪問があったが、これを除いては、加治木町との特段の交流はなかった、との聞き取りをした。この地のクモ相撲を記録した長崎新聞のビデオ映像(長崎新聞 ながさき動画館 2004 年 6 月 20 日撮影)では、行司が横棒を若干上向きにするすることで、下の方に位置していたクモが上の方に歩み始め、上方に位置するクモとの闘いを促す様子が見られた。

各地のコガネグモ相撲の調査結果を表 1 に示す。

表 1. 各地のコガネグモ相撲

調査地	かつての闘わせ方	現在の闘わせ方	加治木町との交流
1. 鹿児島・加治木町	地面に立てた垂直な棒上	たて棒支柱に固定した横棒上	—
2. 高知・中村	行司が手で持つ横棒上	たて棒支柱に固定した横棒上	不明
3. 熊本市		たて棒支柱に固定した横棒上	有
4. 和歌山・海南市		たて棒支柱に固定した横棒上	有
5. 長崎・ 大瀬戸町檜浦郷		行司が手で持つ横棒上	無

考 察

現在各地で行われている行事化されたコガネグモ相撲には、多くの共通点がみられるが、横棒の扱い方には違いがみられる。鹿児島・加治木町、高知・中村、熊本市と和歌山・海南市のコガネグモ相撲では、現在横棒の土俵はその一端がたて棒の支柱に取り付けられている。一方、長崎県西海市大瀬戸町檜浦郷では、行司が手で横にして持つ棒上で 2 匹のコガネグモを闘わせている。加治木町では、1925 年(大正 14 年)に「加治木蜘蛛同好会」が結成され、おとなたちによってコガネグモ相撲が行事化された。この前年のコガネグモ相撲につ

いて、棒を突き立てこれに2匹のクモを這わせて行っただとの記事が、『鹿児島新聞』1924年（大正13年）6月7日付に掲載されている。加治木町では、終戦後1946年5月に「くも合戦大会」が復活した（加治木町教育委員会 1999）。この頃撮影されたと思われる写真では、横棒の一端がたて棒の支柱に取り付けられている。加治木町では、1925年の行事化に前後し、地面に突き立てた棒上でクモを闘わせていたと推察されるが、1946年頃には、横棒の一端をたて棒の支柱に取り付ける方法が採用されていた。加治木町では、横棒土俵の一端をたて棒の支柱に取り付けて行う方法が早くから考案されていたと思われる。また、高知・中村では、1950年（昭和25年）にコガネグモ相撲が行事化され第1回大会がおこなわれた。高知・中村のコガネグモ相撲については、行司が手で横にして持つ棒上でかつて行われていた写真がある（池田 1989）。高知・中村では、行司が手で持った横棒上でクモを闘わせる方法から、横棒土俵の一端をたて棒の支柱に取り付けて行う方法への変化があったことになる。

次に、加治木町の横棒土俵の扱い方が、各地へ伝播した可能性について考察する。藤本 宏さんから熊本のコガネグモ相撲は、加治木町の「くも合戦」を参考にした、との聞き取りをした。また、和歌山・海南市のコガネグモ相撲を始めた東條 清さんはクモの研究者であり、加治木町の「くも合戦」を訪れていた（東條 2001）。和歌山・海南市についても、加治木町の「くも合戦」を参考にして始めた可能性がある。この地のコガネグモ相撲は、加治木町との積極的な交流がみられ、現在加治木町の技法が採用されている。以上のことから、加治木町の横棒土俵の扱い方が、熊本市と和歌山・海南市に伝播したことが指摘できる。なお、高知・中村のコガネグモ相撲と加治木町のコガネグモ相撲の関連については現段階ではよくわからない。一方、長崎・大瀬戸町檜浦郷では現在、行司が手で持った横棒上でコガネグモ相撲が行われている。宮守公治さんからこの地のコガネグモ相撲は加治木町の「くも合戦」と特段の交流はなかった、との聞き取りをした。大瀬戸町檜浦郷では加治木町との交流がなかったことから、行司が手で持った横棒上でクモを闘わせるという方法が、現在この地に残っているという可能性を指摘しておく。

各地で行われている現在のコガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方の比較により、この伝承遊びが行事化された以後も人々はこの遊びに工夫を重ね、遊びとしての質を高めてきた可能性が示唆される。加治木町では、たて棒の支柱に取り付けられている横棒の高さは、行司の目の高さに合わせてあり（加治木町教育委員会 1999）、熟練された行司の鋭い目が、瞬時の勝敗を判定する。また、クモが死なないように配慮されている。クモが相手のクモに糸をかける、あるいはクモが相手のクモにかみついた瞬間に、行司はクモに息を吹きかけ 2

匹のクモを分かち離す。行司が横棒の土俵を持っていたは、この素早い行司さばきはできない。たて棒の支柱に横棒土俵を取り付ける工夫により、行司は両手を使うことが可能となった。この工夫は、瞬時の的確な勝敗の判定とクモを死なせない行司さばきをもたらした。クモの行動のより細部にまで勝敗のルールを設定するように、コガネグモ相撲の遊びとしての質を高めてきたと考えられる。また、たて棒の支柱に横棒土俵を取り付ける工夫は、クモ相撲の行事化による参加者数の増加と、それに伴う試合の長時間化から生じる、長時間にわたって横棒土俵を持つ行司の辛さを軽減するという意味があった。行司が横棒土俵を手で持つ方式でのクモの闘いを促す方法は、大瀬戸町檜浦郷にみられるように、クモが上方に向かって歩くという習性に基づき、横棒土俵を傾けることであった。これは、クモの闘いを促す最も自然な方法と考えられる。このことから、行司が横棒土俵を手で持つ方式は、クモ相撲の原型の一つと考えられるだろう。一方、横棒をたて棒支柱に取り付けた加治木町では、クモの脚に砂をかけることでクモの闘いを促している。これは、クモの闘いを促す新たな工夫の創造と考えられる。このことは、人々がこの伝承遊びに工夫を凝らしてきたことを示唆する事例の一つといえる。人々は、子どもの頃に遊んだコガネグモ相撲という伝承習俗を保護・継承するに留まらず、この遊びが行事化された以後も、この遊びの質を高める工夫を創造してきたと思われる。

謝 辞

加治木町くも合戦保存会の西村正和さん、高知県四万十市中村の一條神社の川村公彦 宮司、熊本くも合戦実行委員会の藤本 宏さん、NPO 法人 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子の北原敏秀 理事長と檜浦山こぶ愛好会の宮守公治さんには、コガネグモ相撲の情報を頂いた。ここに記し感謝申し上げます。

引用文献

- 池田博明 1989. クモ合戦. pp. 195-202. In:梅谷献二・加藤輝代子（編）クモのはなしⅡ. 技報堂出版（東京）, 239 pp.
- 加治木町教育委員会 1999. 加治木のくも合戦の習俗. 加治木町教育委員会（鹿児島）, 160 pp.
- 川名 興・斎藤慎一郎 1985. クモの合戦 虫の民俗誌. 未来社（東京）, 238 pp.

- 斎藤慎一郎 2002. 蜘蛛 ものと人間の文化史. 法政大学出版局 (東京), 312 pp.
- 斎藤慎一郎 2004. クモの喧嘩遊びをめぐる民俗文化論. pp. 337-354. In: 上田哲行 (編) トンボと自然観. 京都大学学術出版会 (京都), 504 pp.
- 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 2008. 北野上・山東地誌 消え行く農村文化の次世代への伝承のために. 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 (和歌山), 325 pp.
- 関根幹夫 2010. フィリピンのクモ相撲の現況. *Acta Arachnol.*, 59: 104-108.
- 東條 清 2001. 和歌山のクモ. 著者自刊, 242 pp.
- 野中健一 2005. 民族昆虫学 昆虫食の自然誌. 東京大学出版会 (東京), 202 pp.
- 吉田 真 2004. クモ合戦の生態学—コガネグモはなぜクモ合戦に使われてきたか? pp. 355-376. In: 上田哲行 (編) トンボと自然観. 京都大学学術出版会 (京都), 504 pp.



アシナガカニグモ

兵庫県宝塚市武田尾 2004年9月26日
関西クモ研究会採集会 撮影：加村隆英

植物に造網していたセアカゴケグモ

荒 川 真

去る 2010 年 9 月 27 日に、木の上にセアカゴケグモの網がある様子を観察したので、報告する。一般的にセアカゴケグモは造網環境として、人工物を好むと言われている（新海 2006）。しかし今回、大阪府吹田市の某所にて、植え込みの枝の間に隠れている網を見つけた。なお、発見場所を公にすると、不特定多数の人々が現場を訪れる恐れがある。近隣に迷惑がかかるのを避けるため、管轄の衛生機関と協議の結果、詳細な発見場所は伏せることになった。

現場付近では以前からセアカゴケグモの姿が見られたため、適宜、駆除を行



図 1. セアカゴケグモの卵囊（上方白丸内）が見える状態にした植え込み。糸で吊られた葉（左下黒矢印）も見える。

なっていた。主に見つかるのは、コンクリート壁に設けられた排水パイプの中や、建物外壁の一階の窓枠下である。これらは、以前から造網が疑われる場所として指摘されてきた環境だ。一方この建物の周囲には、外壁から 65 cm 程度の距離を保って、樹高 80 cm 程度のイヌツゲと思われる植物が植えられている。今回確認されたのは、この木の上に造られていた網である。

網は、木が多数に枝分かれしている部分に造られ、葉で隠されていた。写真(図 1 - 3) は、その枝を掻き分けて、個体や卵囊が見えるようにしてから撮影したものである。枝の位置関係を変えるまでは、個体や卵囊どころか、糸の存在にすら気付くことは難しい状態だった。発見の手掛かりとなったのは、地面まで伸びた糸である。人工物に作られた網の場合と同様、糸に吊られて落ち葉などが宙に浮いていた。また、木の根元近くを棒で探ると、落ち葉は付着していないが弾力の強い糸が他にも見つかった。これらの糸を上へと辿ることにより、地面から 20 cm 程度から 80 cm 程度の高さの間で、さらに複数の網を見つけた。

上記の観察から本報告作成までの間、この植え込みとその近辺での新たな造網を警戒してきた。幸いなことに現在までのところ、セアカゴケグモの網は見つかっていない。しかし今回、彼らが好むとされる人工物だけでなく、その周囲の植物にも網が存在する可能性があることが確認された。同様のことは他の



図 2. 網の上の卵囊.



図 3. 網の上のメス成体.

地域でも起きうると考えられる．この報告が，より精度の高い駆除を行なうために役立てば幸いである．

末筆ながら，この観察について報告を書くよう勧めてくださった，追手門学院大学教授の加村隆英先生と立命館大学名誉教授の吉田真先生に御礼申しあげる．

参考文献

新海栄一 2006. ネイチャーガイド 日本のクモ. 文一総合出版.



ムツバハエトリ

大阪府東大阪市枚岡公園 2005年5月29日

関西クモ研究会採集会 撮影：加村隆英

奈良県産のムロズミソレグモとマダラヒメグモ

荒 川 真

本報告では主に、採取したムロズミソレグモ 3 個体について述べる．また本種とともにマダラヒメグモも採取していたため、これも併せて文末に記す．なお、ムロズミソレグモについて、初めの 2 個体を同定してくださった東京大学の谷川明男先生と三重県の熊田憲一氏に、謹んで御礼申しあげる．また本報告の作成に際して、引用はしなかったものの、過去の本種に関する報告文を複数確認した．これらの資料の収集にご尽力くださった追手門学院大学の加村隆英先生と兵庫県の清水裕行氏に、この場をお借りして御礼申し上げる．

発見場所はいずれも、奈良県奈良市にある筆者自宅の周辺である．採取時期および詳細な場所は、それぞれ異なる．初めて採取した個体は 2010 年 5 月 1 日の 01:30 頃、自室内のカーテン上にいたオス成体（図 1）である．次は 2010 年 10 月 30 日 22:00 頃、自宅玄関前の外壁で静止していた個体で、メス成体だった（図 2）．そして最後に採取したものは、2010 年 12 月 30 日 12:00 頃に屋外の消火器箱の中にいたメス成体（図 3）である．



図 1. 採取後 13 日目のオス成体．右第三脚の付け根にダニがついている．本写真撮影の頃から餌をあまり食べなくなり、8 日後に死亡．



図 2. 採取後 49 日目のメス成体。ハエやアブ、ガガンボなどを入れるといずれもよく食べる。そのためか、オスと比較すると痩せていない。撮影当日に谷川先生の下へ。

初めに採取したオスは間もなく死亡したが、メスは両個体とも数ヶ月の間飼育することができた。そこで、飼育下で観察された行動の特徴を述べる。まず普段の移動の際には、持ち上げた歩脚を揺らしながら、周囲を探るようにして歩く。移動速度も歩脚を揺らす動きも、多くの場合はゆっくりとしている。一方、振動などを感じた場合には、短距離をすばやく走る。ただし、人影に対する反応は鈍い。採取の際にはいずれの個体も、ビニル袋で覆っただけでは動かず、袋越しに触れると初めて歩きはじめた。

飼育には直径 25 mm 程度、高さ 55 mm 程度の円筒形の容器を、立てて使用した。この中でそれぞれの個体は歩き回り、壁面に糸を張った。糸は壁面に無数の点で付着している。容器にハエなどを入れた時には、この糸や自分の体に餌が触れるとすばやく反応し、捕食した。移動や捕食における行動からは、あまり視覚情報を重要視していないように感じられた。

最後に採取したメス成体は卵嚢を作成したので、産卵前後の様子も観察することができた。産卵の約 1 週間前に、メスは容器内の上下で大量の篩板糸を出しはじめた。篩板糸はバリケード状に、容器断面を粗く埋めるほどの密度で張られ、メス自身も簡単に通り抜けることはできない。その後、現場を見ることはできなかったが、容器壁面に卵嚢が作成されていた (図 4)。この容器で飼育

すると、上側にある蓋のすぐ内側には、裏打ちするように糸が張られた。卵囊より下側に張られたものよりも、バリケードとしての厚さは薄い。そこで試しに蓋を外して手前の糸を取り去り、蓋の代わりに別の容器を、口同士を合わせて固定した。すると糸は、新たな容器の底ではなく、容器同士の境付近に厚く張られた。この過程の一部を観察すると、卵囊付近で糸を出す際には、親は基本的にいずれかの歩脚で卵囊に触れたままで篩板糸を出していた。したがって卵囊周囲の空間の広さは、親の体格に基づいて決まると推測される。

上述の3個体のうち、先に採取した雌雄各1個体は、谷川先生の仲介で国立科学博物館に寄贈した。標本番号は、オス（2010年5月1日採取）がNSMT-Ar 9621、メス（2010年10月30日採取）がNSMT-Ar 9620である。

なお、消火器箱の中でムロズミソレグモを見つけた際、箱の奥にはヒメグモ類もいた。採取して確認したところ、これはマダラヒメグモのメス成体であった。網には既に出囊済みの卵囊が複数存在し、その後も飼育下で作成した8個の卵囊から幼体が出囊した。新海ら（2010）によると、いずれの種も奈良県では初めての採取報告となるようだ。しかし両種とも、成体が見つかり、かつメスが産卵している。そのため、どちらも現状では奈良県に定着していると言えそうだ。



図3. 左：消火器の箱を開けて上から見たところ。消火器自体を包んでいるビニル袋の口の結び目に、袋を透かしてかすかに影が見えた。右：ビニル袋の結び目をほぼ水平に覗いたもの。重なり合ったビニル袋を若干動かした隙間から、ムロズミソレグモに特徴的な明るい茶色と、頭胸部背面の黒い模様が見えた。



図 4. 円筒形の透明容器の中で、卵嚢を保護するメス。産卵するまでは容器を上下逆さに置いていたので、写真では天井に当たる部分にハエの死骸が溜まっている。卵嚢内の卵は、卵嚢作成時に下側に相当した位置に溜まっている。容器の向きを変えて数時間待つと、卵嚢内の多くの卵の位置は変化しないが、メスは頭を下に向けていることが多い。

最後に、手元にあるムロズミソレグモの卵嚢から幼体が出囊したことを書き添える。死亡率が高い上に、生き残った個体もまだ小さいが、いずれ成長の様子を報告したい。

参考資料

新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2010. CD 日本のクモ Ver. 2010.

パプアにおけるホシスズミグモの垂直分布

Vertical distribution of *Cyrtophora moluccensis* (Arachnida: Araneae) in Papua

関根 幹夫

Mikio SEKINE

The *Cyrtophora* spiders which had been identified with *Cyrtophora moluccensis* were divided into three independent nominal species, namely *Cyrtophora cylindroides*, *C. moluccensis* and *C. ikomosanensis*. *Cyrtophora moluccensis* lives in Japan (Iriomotejima Is.), Taiwan, wide-spread in South East Asia, and Mariana Islands to Australia (Tanikawa, Chang & Tso 2010). I surveyed this species on August 10-15 in 2011 at Jayapura (0 m above sea level) and Wamena (1,500 m above sea level) in the Baliem Valley in Papua (Irian Jaya). I was also driven by 4WD from Wamena to Lake Habema (3,300 m above sea level) searching this species. Although *Cyrtophora moluccensis* lives from 0 m to 2,500 m in height above sea level in Papua, it does not live in the tropical cloud forest (2,500 m-3,500 m) or higher area than the forest limit (3,500 m) (Fig. 2).

In addition, a collection of meteorological data from Japan Meteorological Agency is shown. MAX and MIN mean monthly maximum and minimum temperature respectively. The data at 2,500 m above sea level in the Baliem Valley is estimated (Table 1).

Key words: *Cyrtophora moluccensis*, vertical distribution, Papua.

これまで *Cyrtophora moluccensis* に同定されてきたスズミグモ類は、それぞれを独立種として、ツツスズミグモ (*C. cylindroides*), ホシスズミグモ (*C. moluccensis*) とスズミグモ (*C. ikomosanensis*) に同定された。ホシスズミグモ (*C. moluccensis*) は、西表島、台湾、東南アジア、マリアナ諸島からオーストラリアに分布する (Tanikawa, Chang & Tso 2010)。筆者は、2011年8月10日～15日、パプア (イリアンジャヤ) のジャヤプラ (標高 0 m) とバリエム谷のワメナ (標高 1,500 m) でこのクモを観察した。また、ワメナからハベマ湖 (標高 3,300 m) へ車で移動しながら、このクモの分布状況を調査した。ホシスズミグモは、パプアで標高 0 m～2,500 mに生息することを確認した。なお、雲霧林 (2,500 m～3,500 m) と森林限界 (3,500 m) より高い地点では、その生息を確認できなかった。



図 1. ホシスズミグモ.

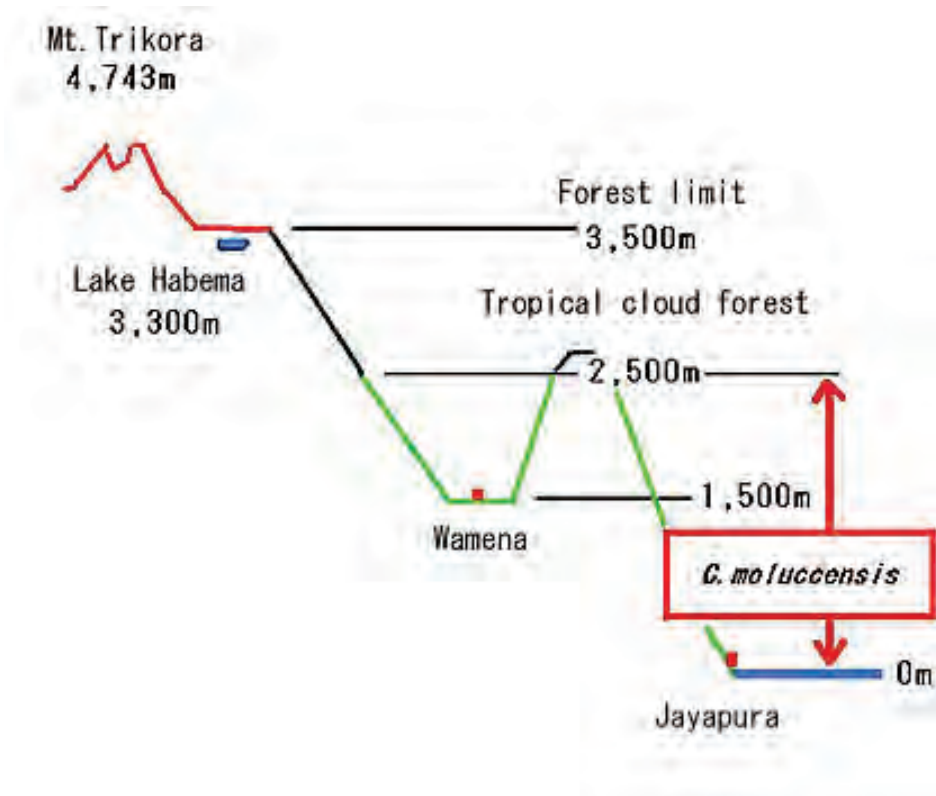


図 2. パプアにおけるホシスズミグモの垂直分布.

表 1. 東京, ジャヤプラ, ワメナ, 標高 2,500 m 地点の月平均最高気温 (MAX) と月平均最低気温 (MIN) (°C).

year/month	Tokyo		Jayapura/Sentani		Wamena		2,500m above sea	
	MAX	MIN	MAX	MIN	MAX	MIN	MAX	MIN
2011.7	30.9	24.5	30.6	23.7	24.5	14.3	18.5	8.3
2011.6	26.0	19.9	31.1	23.8	25.4	14.9	19.4	8.9
2011.5	22.2	15.0	32.0	24.5	26.5	15.2	20.5	9.2
2011.4	18.9	10.3	31.1	24.2	26.5	15.4	20.5	9.4
2011.3	12.3	4.0	31.5	23.9	26.8	15.0	20.8	9.0
2011.2	11.2	3.2	30.3	22.6				
2011.1	9.1	1.5	32.9	23.3	27.4	14.2	21.4	8.2
2010.12	13.7	6.2	32.3	23.9	27.0	15.1	21.0	9.1
2010.11	17.2	10.0	33.5	23.9	27.9	14.8	21.9	8.8
2010.10	21.8	16.5	33.1	24.0				
2010.9	29.0	22.3			27.4	14.2	21.4	8.2
2010.8	33.5	27.0	32.3	23.5	27.3	13.7	21.3	7.7
Average	20.5	13.4	31.9	23.8	26.7	14.7	20.7	8.7

た (図2).

参考までに, 気象庁の世界の月天候データ (http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/climatview_jp/index.html 2011年9月3日 参照) のうちの, 東京, ジャヤプラ, ワメナの2010年8月~2011年7月の12ヶ月の月平均最高気温と月平均最低気温, 及びワメナの値から推定したバリエム谷の標高 2,500 m地点での気温を載せる (表1).

引用文献

Tanikawa, A., Chang, Y.-H. & Tso, I.-M. 2010. Taxonomic revision of Taiwanese and Japanese *Cyrtophora* spiders hitherto identified with *C. moluccensis* (Arachnida: Araneae), using molecular and morphological data. *Acta Arachnol.*, 59: 31-38.

関西クモ研究会 採集会の記録 (尼崎市都市緑化植物園)

2011 年度の採集会は、5 月 22 日と 9 月 25 日に尼崎市都市緑化植物園（兵庫県尼崎市東塚口町 2 丁目）で実施した。同植物園が一般市民の参加を募り、関西クモ研究会会員と合同で、観察・採集を行った。



図 1. 2011 年 9 月 25 日の参加者。 (撮影：野中勝子さん)

参加者：

【2011 年 5 月 22 日】

浅川 正，荒川 真，加村隆英，清水裕行，新垣雅美，関根幹夫，西川喜朗，西本 裕，船曳和代，梶元智子，吉田 真 (11 名)；他に植物園の職員および市民の皆さん 5 名。

【2011 年 9 月 25 日】

浅川 正，伊規須貞子，上田祐補，加村隆英，黒田あき，西川喜朗，西本 裕，船曳和代，宮谷篤子，宮谷和伸，村上協三，山田廣士 (12 名)；他に植物園の職員および市民の皆さん約 15 名 (図 1)。

確認できたクモ類

以下に示す一覧には、現地で確認しただけのものも含まれている。すべてを採集して、標本によって同定したわけではないので、雌雄や成体・幼体を区別できていない場合もある。(5/22) および (9/25) は、採集日を示す。アステリクス(*) を付したものは西川喜朗氏の同定による。他は原則として 加村隆英が同定・確認した。科の配列は、小野 (2009) に準拠している。

ジグモ科

ジグモ 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

タマゴグモ科

クスミダニグモ ♀成体, ♂成体 (9/25)*.

ヤマシログモ科

ユカタヤマシログモ (5/22).

チリグモ科

チリグモ (5/22; 9/25).

ガケジグモ科

クロガケジグモ ♀成体, 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

ハグモ科

ネコハグモ (5/22); ♀成体 (9/25).

ヒラタグモ科

ヒラタグモ ♂成体 (5/22); 幼体 (9/25).

ヤチグモ科

メガネヤチグモ ♀成体 (9/25)* (図 2).

シモフリヤチグモ ♀成体 (5/22)*.

タナグモ科

クサグモ 卵嚢を保護する♀成体 (9/25).

コモリグモ科

ハリゲコモリグモ類の 1 種 幼体 (9/25).

ササグモ科

ササグモ 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

ヒメグモ科

ハンゲツオスナキグモ 幼体 (5/22); ♂幼体 (9/25).

マダラヒメグモ 卵嚢を保護する♀成体 (9/25).

スネグロオチバヒメグモ 幼体 (5/22)*.

サトヒメグモ 卵嚢を保護する♀成体 (5/22).

オオヒメグモ (5/22; 9/25).

ニホンヒメグモ 卵嚢を保護する♀成体 (子グモが出嚢しているもの多い)
(9/25). [ハチの幼虫に寄生されている1個体を確認 (9/25) (図3).]

ジョロウグモ科

ジョロウグモ ♀幼体, ♂幼体 (9/25).

アシナガグモ科

チュウガタシロカネグモ ♀成体 (9/25).

トガリアシナガグモ (9/25)*.

コガネグモ科

マルゴミグモ 幼体 (9/25).

ギンメッキゴミグモ 幼体 (5/22); ♀成体, 幼体 (9/25).

サツマノミダマシ 幼体 (5/22).

ビジョオニグモ ♀成体 (9/25).

アシダカグモ科

アシダカグモ ♀成体 (5/22)

エビグモ科

アサヒエビグモ 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

キンイロエビグモ 幼体 (9/25).

カニグモ科

キハダカニグモ (5/22).

フクログモ科

フクログモ属の1種 幼体 (9/25).

ウエムラグモ科

イタチグモ 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

ネコグモ科

ネコグモ (5/22); 幼体 (9/25).

オトヒメグモ ♂成体 (9/25)*.

ハエトリグモ科

ヤガタアリグモ ♂成体 (9/25).

アダンソンハエトリ ♂成体, 幼体 (9/25).

ネコハエトリ 卵嚢を保護する♀成体, 幼体 (5/22); 幼体 (9/25).

チャスジハエトリ 幼体 (5/22); ♀成体 (9/25).

ミスジハエトリ 幼体 (5/22); (9/25).

シラヒゲハエトリ ♀成体 (9/25).

(計 39 種)



図 2. メガネヤチグモ.

(撮影：加村隆英)



図 3. ハチの幼虫 (矢印) に寄生されたニホンヒメグモ.

(撮影：加村隆英)

付記

9月25日に確認したハチの幼虫に寄生されているニホンヒメグモ (図3) は、生きたまま持ち帰り、翌日、大阪市立自然史博物館の松本吏樹郎氏に郵送し、進呈した。

謝辞

この採集会の実施にあたり、(財) 尼崎緑化協会の野中勝子氏はじめ植物園スタッフの皆様には、事前の市民への広報、配付資料の準備、当日の園内の案内等、たいへん多くのご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

文献

小野展嗣 編 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会.

(文責：加村隆英)

滋賀県山門水源調査にて

黒田 あき

2011 年春、立命館大学の吉田先生からメールがきました。「突然ですが、私は、『山門（やまかど）水源の森を次の世代に引き継ぐ会』の伊藤博さんのついで、この森のクモ調査を行うことにしました。ちょっと前までは山門湿原と言っていた森で、滋賀県の最北部・長浜市西浅井町にあります。私もそこに行ったことはありませんし、クモの調査はやられたことはありません。せっかくなので、行ってみたいと思われる方は至急私までご連絡ください。」というものでした。

第一に、山を歩いていて「湿原」を見つけても、たいていの場合は柵に囲われていて入れないというイメージがあったのと、第二に追手門学院大学に在学中、西川先生の授業の発表で、たまたまカモメを題材に調べていたら、湿原地は鳥や動物たちが子育てをするために重要であるにもかかわらず、いま日本中でどんどん失われていると知ったので、それらを守っておられる方々がいることにも大変関心を持って、即答で参加することにしました。

最初の採集日は、2011 年 7 月 12 日でしたが、私だけ糞虫のトラップを仕掛けたいと思ったため、現地の伊藤さんをお願いして、その 2 日前の 10 日にも大学後輩の上田祐補くんと訪れました。その日、初めて「トゲグモ」を沢山見ました。トゲグモ類は、息子が沖縄県やフィリピンの暑い所で採集したものしか見たことがなかったので、まさか近畿圏内で見られるとは思っていなかったうえに、伊藤さんには、ここでカトウツケオグモが見つかっていると聞いており、これがまさか？ … でも円網を張っている … 一体？と悩みました。顕微鏡で確認もして「トゲグモ」で間違いありませんでしたが、独特な網の特徴も観察でき、大変良い一日となりました。

そして、予定通り 7 月 12 日に本格的に調査が行われて、さらに秋にも調査が行われることを知りました。そして、またまたワガママに本調査の 2011 年 10 月 23 日より前に、夏から秋のクモに間に合うのではと、10 月 11 日に熊田憲一さんのご協力を得て、現地に行くことになりました。

この日は、伊藤さんが、「分類がわかって写真撮影出来るのはジョロウグモばかり」とおっしゃったので、私は「ジョロウグモの網の大きさとオスの数は比例する、網が大きいジョロウは色っぽいオスに人気があると思う、このことについての研究者はいないと思うので、そこに注目して観察してみてください」とウケもかねて？言いました。すると熊田さんが「そういうことを『くものい

と』に載せないと！」とおっしゃいました。伊藤さんは、かなり熱心なので、次回からは注目してみるようなことをおっしゃっていました。

これは、本当に結果が出るかも知れません。出来れば都会生活を行っているジョロウグモも結果が同じか知りたいです（私が調べるのか？）。とにかく、私たちは、たくさんのクモを採集することに気を取られていますし、場合によっては、ジョロウグモは邪魔だなあと思うこともしばしばあります。それに、なぜジョロウだけが特殊な網を張るのか？とか思いつつも、私は調べていません。今回の調査のおかげで、観察に対する姿勢が大事だということが採集結果よりも先に得られました。

また別の機会でも、ジョロウグモ（女郎蜘蛛）という気の毒な名前について（これが「遊女」を意味する「女郎」であれば、の話ですが）、先日の尼崎市都市緑化植物園の採集会の時に、後輩の上田くんは「キャバ嬢かソープ嬢ですね」とのことでした。採集しながら、そんな名前を新種に付けられるだろうか？と思いました。皆さんもそう思いませんか？

網やクモのサイズを確認するために、いつもメジャーは持ち歩いていますが、計ったことがありません。言い訳ですが、一度にあれもこれも出来ません、でも、言うだけでなくトライしてみようと思いました。

今回の現地調査（2011年10月11日）で一緒した熊田憲一さん、楽しいご指導、本当にありがとうございました。伊藤さんご夫妻も、一日我々とともに採集にトライしていただき、ありがとうございました。4人で頑張れたおかげで本当に沢山採れました。



山門水源調査（2011年10月11日）の参加者。
左から、伊藤博さん、熊田憲一さん、黒田、伊藤孝子さん。

関西クモ研究会 2010 年度会計報告

収入：	2009 年度からの繰越金	176,272
	会費 2010 年度前受け分繰り入れ	46,000
	会費 2010 年度分入金	13,000
	会費過年度分入金	11,000

=====		
合計		246,272

支出：	くものいと No. 44	用紙, 発送用封筒	1,904
	同上	印刷費	13,909
	同上	裁断料	2,000
	同上	郵送費	12,150
	文房具類		103
	採集会・例会等の案内 郵送費		15,700
	事務連絡等 郵送費		1,110
	送金手数料		500
	東日本大震災義援金 (日本赤十字社へ)		50,000
	2011 年度への繰り越し		148,896

=====		
合計		246,272

会費前受け状況

2010 年度末における会費前受け分の合計は, 71,000 円である.

その内訳は次のとおり. 2011 年度分 41,000 円; 2012 年度分 12,000 円; 2013 年度分 8,000 円; 2014 年度分 5,000 円; 2015 年度分 3,000 円; 2016 年度分 1,000 円; 2017 年度 1,000 円.

上記のとおり, 報告します.

会計幹事 加村隆英

会計監査報告

2010 年度会計につきまして, 関係証票書類に基づき監査の結果, 適正に処理されていることを報告します.

2011 年 4 月 9 日 会計監査 関根幹夫

編集後記

本誌「くものいと」の第1号が発行されたのは1982年8月です。当時の編集担当者は清水裕行さんで、1990年12月発行の第7-8合併号まで担当されました。続いて、編集担当者は吉田真さんに交代します。ただ、1991年度に発行された第9号と第10号には、編集担当者名の記載がなく、明瞭ではありません。当時の記憶をたどってみると、第9号は臨時で中継ぎとして加村がお手伝いし、第10号から吉田さんが担当されたようです。そして、その後、吉田さんの担当は第44号（2011年3月発行）まで続きます。その間、第15～21号は畑守有紀さん、第27～32号は梶元智子さん・船曳和代さん、第33～36号は赤松史憲さんが編集に加わっておられますが、吉田さんは1991年からなんと20年間にわたって編集を担当してこられたわけです。これはすごいことですね！

あらためて、吉田さんはじめ、今まで編集に携わってこられた方々に心から感謝申し上げるとともに、そのご努力に敬意を表します。

さて、今号から私が編集を担当することになりました。吉田さんには、交代して早々に、版下のチェックでご協力いただきました。まことにありがとうございます。

編集を担当するにあたり、関西クモ研究会が発足した時に、故 八木沼健夫先生が「くものいと」について、「みんなで集まった時に話をするような内容をそのまま書いたらええねん」とおっしゃったことを思い出しています。たしかに、このようなささやかな同好会誌ですから、堅苦しく考える必要はまったくありません。どんな内容でもかまいませんし、そのスタイルも自由です。しかし一方で、印刷物として世に出すからには、それなりに整えなければならない体裁もあります。編集にあたっては、同好会誌としての自由度の高さゆえのむずかしさもあるように感じています。

とはいえ、原稿がなければ、何も始まりません。皆様からのご投稿をお待ちしています。

原稿は、添付ファイルで [haruka. kamura@res.otemon.ac.jp](mailto:kamura@res.otemon.ac.jp) までお送りください。ワードファイルまたはテキストファイルをお願いします。写真や図表を伴う場合は、ワードにあらかじめ挿入して、およそのレイアウトを示していただいてもかまいませんし、文章とは別ファイルでお送りいただいてもかまいません。いずれにしても、最終的なレイアウトは編集担当者にお任せくださるようお願いします。

(加村隆英)

くものいと No. 45

28 October 2011

関西クモ研究会

事務局：

567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室

会 長：田中穂積

庶務幹事：山野忠清

会計幹事：吉田 真

編集幹事：加村隆英

顧 問：西川喜朗・船曳和代

会計監査：関根幹夫